

## 二 天竜川の橋と渡し舟

天竜川は日本でも代表的な大きな川です。天竜川は水量も多く、両側を標高の高い南アルプスと中央アルプスの間に挟まれて深い谷を形作っているだけに、対岸に行くことには難儀したものと思われれます。一章では戦国時代の天竜川がもたらした水害を見てきましたが、次に戦国時代にかにしてこの川を渡っていたかを見ていくことにします。延徳元年（一四八九）十一月六日、天竜川の橋供養が行われました。この時に声を出して読まれた文（風誦）が次のように伝わっています。

信州文永寺において橋供養の時、曼供養を行う時の風誦なり。

敬白す

風誦を請う事

三宝衆僧噯嶮物一裏

それ水路に橋梁を建つは、福田八種の一、功德十種の惣なり。吾が能仁尊者因地にありて、大鹿王たり。身

づから河上において橋と作り、諸鹿を三面の野火より救うなり。宝女菩薩菩提道を修行する時、道路の瓦石惡刺を除去し、津途嶮絶に、橋梁を施し作る。この因縁をもって菩提の果を得たり。及び米菽氏阿耨川上に宝橋と化し、大神力を現ぜし等、載せて竺墳にあるもの、汗牛充練、縷陳にいとまあらず。企てて止むのみ。そもそも大日本国信州路伊那県、一条の大河の南北に貫くもの、これを号して天龍という。将に一道の板橋を創架し、以て緇素往還の要路をなさんとす。上下視るもの、感嘆せざるなく、遐邇聞くもの、歛心せざるなし。或は青蠅白絮を携えて以て造宮の繁費を助け、或は一木片板を担いて、以て成風の余功に資す。凡そ小助縁斟奉加、勝計すべからず。去る長享戊申の冬、橋已に成る。嚴寒朝涉の艱を免れ、漲水覆舟の怖を除く。物を利濟すること。橋梁その最たらざるか。今日すなわち権大僧都法眼和尚位を屈し奉りて、大阿闍梨耶となし、曼荼羅供養の錦筵を延べて、以て橋梁堅固の懇請を致す。冀わくはこの勝業に答え、梁柱傾かずして、千霜万雪の運を送り、板檻撓まずして一風七水の劫に及ばんことを。方今蒲牢を叩き、青響海会の群聴を驚かす。また願わくは功德の余薰を以て、上

は非想非々想の頂きに達し、下は阿鼻奈落迦の底に徹すべし。よって風誦修するところ件の如し。

延徳元年十一月六日

沙弥源薫敬（信史九一四八八）

大変難しい文章ですが、一応私なりに訳してみたいと思います。

信州文永寺（飯田市）において橋供養に際して、曼荼羅供養を行うときに声を出して読んだもの。

敬って申し上げます。

風誦（ふうじゅ、ふうしょう）を請うこと

三宝（仏と、その教えである法と、その教えをひろめる僧。仏・法・僧）の一つである衆僧が在家の布施にたいして行う法施物（風誦）一裏。

水路に橋を作ることは福田八種（尊敬・供養または施しをすれば福德を生ずる八種の田）の一つ、功德一〇種のすべてに当たる。我々の釈迦がインドに居たときは大鹿王であった。自ら河上において橋となり、諸鹿を三面の野火から救った。宝女菩薩が菩提道を修行していたとき、道路の瓦と石、悪い刺といったものを

除去して、船の集まるような場所の途中や険しい絶壁の場所に橋梁を施しとして作った。この因縁によって仏の悟りを得ることができた。及び米菽氏は阿耨川の上に宝橋となつて、大神力を表わしたなど、天竺のお墓の中に眠るものは、牛が汗をかくほどの重さ、棟まで届くほどの大量の蔵書のなかに事細かく述べられていることは枚挙に暇がない。そこでこれを列挙しようとしたが止める。

そもそも大日本国の信州路にある伊那県には、一条の大きな川が南北に貫いているが、これを号して天竜川といっている。この天竜川に一道の板でできた橋を架けて、僧と俗人全ての人の往還の交通の要としようとする。身分の上下を通じてこれを見た者で感嘆しないものはなく、遠いところの者も近いところの者も、うれしく思わない者はいなかった。ある者はお金や白いお米を持って来て橋を作る多くの費用の助けをし、ある者は一木片や板を担って、見事に橋を作りあげるための余功として助けた。およそ小さな助けや縁によって奉加に加わったりした者の数は、挙げて数えることができない。去る長享二年（一四八八）の冬に橋はすでにできあがった。これによって、厳しい冬の寒



2. 文永寺の山門 （提供 印南 喬氏）

さのなかで朝川を渡る大変な苦勞を免れ、大水の際に船が転覆するのではないかという恐怖感を取り除くことができた。ものに利益を与え助けることは、橋梁がその最たるものであらう。今日すなわち権大僧都法眼和尚のくらいを曲げて大阿闍梨耶として、曼荼羅供養のために錦筵を広げて、橋梁が堅固でありますようにとのねんごろな祈禱をする。強く願ひ希望することにはこの仏教の正しい行いに答えて、橋梁が傾かないで、千回の霜・万回の雪の時を送り（きわめて長い間）、橋の板が折れ曲がりたり、たわんだりしないで一風七水の永遠の長きに及ばんことである。そこで今鐘を叩いて清い響きを仏教の海に集まった多くの人々に聞かせて驚かす。また願わくはこの功德の余薫によって、上の者は仏教の無色界の第四天で、三界の諸天のうちの最高位の非想非々想天の頂きに達することができ、下の者は八大地獄の第八の阿鼻の地獄の底に徹しているように。そこで風誦をこのように修する。

延徳元年（一四八九）十一月六日

沙弥薰敬

大体こういうことだと思えます。この風誦で明らかかなうに、長享二年（一四八八）に天竜川に橋が架けられました。そしてその翌年に橋の供養がなされたのです。ここで注目すべきは、この橋は地域の領主が架けたものでなく、福田思想を前提にして僧侶たちが中心になり、多くの民衆の善意をもとにした勸進という形で作られていたことです。この時期、文永寺のある南原の地域は知久氏で、大変大きな勢力を持っていました。また飯田の地方には、守護の小笠原氏の一族の小笠原氏が根を張っていました。私達の一般的な考えに立つなら、そうした大きな領主が橋ぐらひは建設してもいいように思うのですが、この当時はそうした権力者が橋を架けるといったようなことは少なく、天竜川に架けられたこの橋のように僧侶が中心になって勸進という民衆の力を結集することによって橋を作るのが一般的でした。このようなことは橋だけでなく、多くの者が往来する道などでも同様でした。

橋や道を僧侶が中心になって作ることは、山崎橋を行基が作り、宇治橋を道登・道昭が造営したという伝承に象徴的にあらわれています。網野善彦氏は山野河海・橋などは無縁の場所であり、僧侶なども無縁のものであったと指摘し（注1）、「橋が寺社の修造などと同じく勸進によって

集められた『神物』『仏物』を用途として修造されたことは、橋がそれ自体『仏神物』であり、人ならぬものの支配する『聖なる世界』に属する場と考えられていたことを端的に物語っている。」（注2）と述べていますが、このように橋は普通の人間が支配する場所ではなかったのです。網野氏の言葉で言うなら無縁の場所であり、橋を勸進して作ったのも無縁の僧侶だったのです。今の私達は橋に対してこのような特別な感情を失っていますが、中世の人々にとって橋は特殊な場所だったのです。

ところで思い起こしていただきたいのは、天文二年（一五三三）に京都の醍醐寺理性院の嚴助が文永寺に赴いた時のことです。嚴助は五月五日に京都を立ち、近江武佐（滋賀県近江八幡市）に泊まり、以後、多賀（滋賀県犬上郡多賀町）を経て美濃に入り、一ノ瀬（岐阜県養老郡上石津町）・井口（岐阜市）・関（関市）・細目（加茂郡八百津町）・蛭川（恵那郡蛭川村）と宿泊しました。一二日は雨のために蛭川に滞留、一三日は田瀬（恵那郡福岡町）、一五日にここを立ち、西大寺泉蔵坊に泊まり、三日間雨のためにここに滞留し、一九日には晴れたので大仏の渡しを渡り妻籠（長野県木曽郡南木曽町）に一宿しました。二〇日も晴れだったので大平峠（南木曽町と飯田市の間の峠）を越えて

飯田荒路に泊まりました。二一日は晴れでしたが飯田（飯田市）に滞留しました。敵助はここから文永寺のある南原までは五〇町だということだと日記に書いたあと、「天竜川大洪水なり、渡これを出すべからずのゆえ、先ず巡幸などこれを遣わす。矢文を以て下向の由、「」申す。返事先ずもって喜悅」（信史一—三八）と記しています（注3）。つまり、この時敵助たちは天竜川が大洪水であったために渡し舟を出すことができず、飯田に滞留して同行してきた巡幸などを先に行かせ、彼らは天竜川を隔てた対岸の者と矢文で連絡を取って、このように自分たちが下向して来たと知らせ、その返事を同じ様に矢文で得たのです。この時には既に天竜川の橋は無くなっているのです。そして、恐らくこの時の天竜川の洪水は、日記からして二六・一七・一八日の雨のために起こったものでしょう。

先に見た風誦で明らかなように長享二年に天竜川に橋を架けた中心者は文永寺に係した僧侶であったようです。ということになりますと、この橋は文永寺に行くことのできる場所近くに作られたと考えることができます。それが天文二年には既に橋は用いられず、天竜川が大洪水だからと、渡し舟すら出すことができないのです。しかも、敵助の日記には橋のことは全く触れられていませんから、長享

二年に架けられた橋は、敵助たちが来る大分前に既に流されていたものでしょう。橋が作られてから天文二年までの間が四五年ですから、恐らく橋は永遠にこの橋が使えますようにと、延徳元年に橋供養をした人達の願いも空しく、あまり長い間は使用できなかったのではないのでしょうか。第一章で、この時期に天竜川上流である諏訪地方は連年洪水にみまわれており、大きな被害を受けていたことを確認し、あわせて天竜川自体も大きな洪水をもたらしたはずだと述べましたが、そうした洪水によってせっかく民衆の力を結集して作った橋も流されてしまっていたのです。

このことは事実として天竜川が大きな洪水にみまわれていたのだということもありますが、当時の架橋技術がまだ未熟であって、橋自体が簡単に流される程度のものであったことも一因でしょう。橋でさえも民衆が自分たちでお金を持ち寄ったり直接柱などを運んだりして善意で作っているのですから、領主の側がこうしたことに力を注いでいなかったことが明らかです。ということは必然的に領主側は天竜川の架橋や治水といったことにも注意していなかったのではないのでしょうか。治水というのは狭い範囲だけを行っても駄目で、上流から下流にかけての広い範囲を統一的概念をもって、多大な費用をかけて行わなければなり

ません。しかし、この時期の領主たちにはそうした発想法も、経済力も、そして技術も持ちあわせていなかったものと推察されます。また、当時の領主たちの領域は後の武田氏などと比較すると狭いもので、一つの川全域を見回しての治水を考えることのできるような状況でもなかったのです。

さて、嚴助たちですが、矢文で対岸と連絡を取った翌二日は晴れになりました。夕方になりますと雨が降り出しました。この日南原の文永寺からは北坊をもって書状が届き、舟の用意ができたので早々に迎えに行くとの連絡がありました（信史一一一三八）。翌五月三日も晴れで、一行は南原の文永寺からの迎えがきたので、飯沼（下伊那郡上郷町）を立ちました。舟に乗っていくと西林院が文永寺の宗徒数十人を引率して迎えにきていました（信史一一一三九）。

天文二年七月二三日、府中（現松本市）の小笠原長棟の軍が伊那郡に攻め寄せ、知久頼元の軍と戦いました。この時嚴助等には「府中よりの諸勢今日着陣す。都合その勢五百騎ばかり打ち出すと云々。知久同じく出陣するの間、見物のため寺家衆を引率せしめ遊覧するところ、天竜川において、西林院落馬し、大曲事どもこれあり」（信史一一一

五六）という事件が起きました。戦争の模様を嚴助たちの一行が見物に行ったわけですが、この時西林院が天竜川の中で落馬したということです。戦争を見物するということは今の我々からするとちょっと考え付かないことかもしれない。ここで問題なのは彼らが川を馬に乗って渡っていたことではないでしょうか。つまり、浅瀬を馬に乗ってけば濡れずにすむわけです。

ということになりますと、一般の人が川を渡るのには徒歩で水に濡れながら渡るしか外に方法がなかったものと思われれます。先に見た橋供養の風誦で、橋は嚴寒の朝に歩いて川を渡る苦勞をなくしてくれると出ているのはこのことを言うのです。しかしこのためには何処が浅瀬かという川の地形を熟知してはなりません。渡れる場所も地形から決定されていたはずで

さて、元禄の末年から宝永（一七〇四―一一）の終わり頃に佐々木喜庵という人が、下条（長野県下伊那郡下条村）を中心に戦国時代に盛えた下条氏についてまとめた本に『下条記』というものがあります。この本は「地方の記録中一頭地を抜いた信用の措ける良書」（注4）と評価されています。この書物の中に「下条のこと、東北は大川、この川のこと後々にこそ舟・筏・橋などを構え通路自由と

なる。往古は不自由の川なり。」(注5)とあります。ここにみえる大川とは天竜川のことです。天竜川はこの時代(江戸時代)には船・筏・橋などによって通行が自由にできるようなったが、昔は不自由だったと述べているのです。

また、同書には「南原山文永寺のこと、御城の鬼門に当たり、幸い真言宗ゆえ、祈願所に御誓約有て、殊の外崇敬たり。然れどもその頃は、天竜川に渡し船これ無し。何とも不自由ゆえ、江の本の大杉を文明四年(一四七二)の九月に切り、これを丸太船に作り、今田の渡しを渡す。この株は殊の外押し裂けて切たるゆえやらん、または久しきゆえやらん、喜庵十六歳にして明暦元年(一六五五)の春、根を探して見ければ、桶の皮ばかりを埋めたるようにて、内は腐りて土となり、杉の小生い二、三本生じてあり。指し渡し八尺ばかりありたり。この時の舟二十ヶ年こたえ、後には鎮西野(下条村鎮西野)八幡の社の前にて二十年目、延徳三年(一四九一)辛亥の九月また大杉を切り、舟に作り今田の渡しを渡す。この株は五、六尺高く切り候ゆえ、今にそのままあり、これも指し渡し五、六尺あり。それ以後は渡し舟出来いたし候や沙汰を聞かず。」(注6)ともあります。この記載によれば、下条氏は文明四年の九月に大

杉を切って丸木船を作り、これを使って今田の渡(飯田市時又)から対岸に向かい、文永寺に詣でたことになります。また、延徳三年にも同様に丸木船を作って天竜川を渡ったということですが。

この記録は江戸時代になってから書かれたものですから、確実性にはやや疑問もあるかと思えます。しかしこの内容は近世にはこの地方では公式の見解とされていたようです(注7)。もしこの記述のようななら、この章の最初にみた延徳元年の風誦にみられる橋は、橋供養をしてからわずか三年ももたずに流されたことになります。この点には疑問があるものの、ともかく戦国時代に天竜川を渡るために、舟があったことはここでも明らかです。そして、この記載によると渡し舟は古くは丸木舟であったようです。さらにこの内容からすると、延徳三年以降間もなく、常設の渡し舟が天竜川に置かれたようです。

平沢清人氏は、「天龍川の渡船は古くは今田・知久平・弁天にあった。時又といわず今田というように川東の名前がついているのは、飯田や伊奈街道・遠州街道へ川東から来る必要から川東の村々が渡船場をつくることからできたのである。江戸時代には橋はまだ一つも天龍川に架かっていず、渡船によらずには川を渡ることができなかったのだ

あった。」(注8)と述べています。

それではこれより上流ではどうかであったのでしょうか。

建長三年(一二五一)二月六日、小出弓能綱は伊那郡小出弓(伊那市)・二吉岡郷の地頭職を子供の師能に譲りました。その譲状には「ひかしかきる、ふなとのしまの田のしりを」(信史四一・一六五)とあります。これが「東限る、船渡の島」だとすると、一三世紀の半ばまでに小出の地域(今の殿島橋のある辺でしょうか)で渡し舟が存在していたことになります。渡し舟はこのように天竜川の上流では早くから使われていた可能性があるのです。恐らく『下条記』の記載に出てくる丸木舟もこれがはじめてではなく、下伊那でも渡し舟は早くからあってその経験を元にして下条氏も舟を作ったものと思われまます。

橋の方はどうでしょうか。『上伊那誌』では、「中世における人馬の往来には(天竜川に注ぐ支流が開析した谷、すなわち田切地形を横断することが)相当の障害であったと思われる。与田切・中田切・大田切・犬田切などをはじめ、大小の天竜川の支流を西よりに大廻りして横断し、南北交通は行なわれたであろうが、その頃の様子を窺いえる史料は乏しい。」(注9)としています。『歴史の道調査報告書』の伊那街道の部分をもてこのことは確認でき、伊

那街道は天竜川の西岸を走っており、天竜川を橋で渡っている例はみられません(注10)。

正保年中(一六四四〜四八)に作成されたといわれる脇坂絵図によると、橋の図は宮木村(上伊那郡辰野町)から平出(同町)へ、木ノ下(上伊那郡箕輪町)から三日町(同町)への二本だけであり、享保元年(一七一六)の高遠領分郷村絵図に西伊那部(伊那市)から東伊那部(同)への橋が記載されていますが、合計してもこの三本のみのようです。また、元禄十一年(二六九八)五月に大久保橋(上伊那郡宮田村)が落ち、以後は渡船があったようです(注11)。天竜川の上流でも中世には橋が架けられていた可能性が少くないのです。

このように天竜川に長い間橋が架けられなかったのは、前章でみた治水工事の場合と同じ様に、天竜川のような大きな川に橋を架けるだけの技術がなく、また領主たちが経済的に支援をしてこうしたものを作っていくという姿勢をみせなかったためと思われます。同時に川が領域の境になることも多かったようです。後ほど四章で見るように川や橋といった場所に対する意識が今の私達の考え方とは大きく異なっていたことも認識しておかなければならないでしょう。



注

- 1 網野善彦『増補無縁・公界・楽』（平凡社・一九八七）
- 2 網野善彦「境界領域と国家」（『日本の社会史 第二巻 境界領域と交通』岩波書店・一九八七）
- 3 『信州下向記』については『新編信濃史料叢書 第一〇巻』（信濃史料刊行会・一九七四）に収録されている。
- 4 『下条記』の市村咸人氏の解説（『新編 伊那史料叢書（四）』二五六頁・歴史図書社・一九七五）
- 5 『新編 伊那史料叢書（四）』二六八頁
- 6 同右二六九頁
- 7 『長野県史 近世史料編』第四卷（三）九五七頁（長野県史料刊行会・一九八三）
- 8 『竜丘村誌』四九三頁（竜丘村誌刊行委員会・一九六八）
- 9 『長野県 上伊那誌 第二巻歴史篇』五〇三頁（上伊那誌刊行会・一九六五）、執筆者は宮下一郎。
- 10 『歴史の道調査報告書Ⅶ―伊那街道（三州街道）―』（長野県教育委員会・一九八一）
- 11 『宮田村誌 上巻』七九六頁（宮田村誌刊行会・一九八二）、執筆者は宮木芳弥。